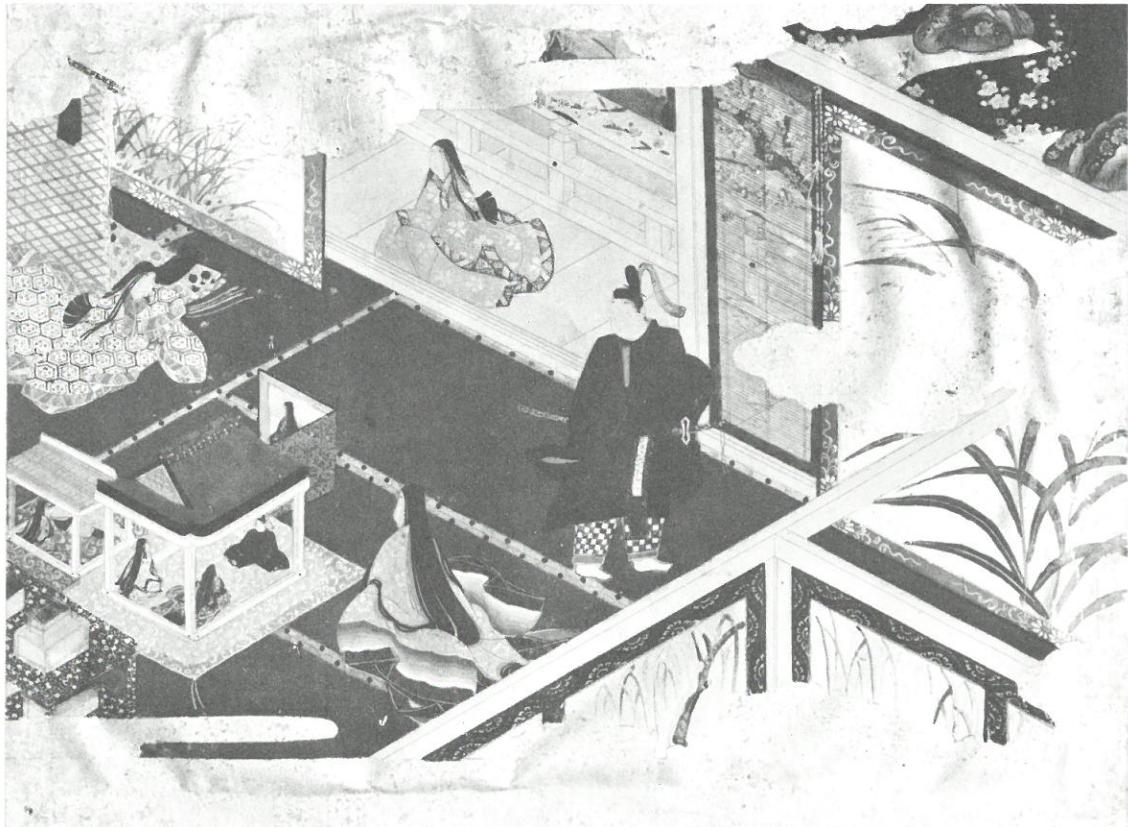


和泉市久保惣記念美術館

常設展示
源氏物語手鑑



紅葉賀より

昭和60年3月1日(金)～昭和60年3月31日(日) 月曜日休館

午前10時～午後5時(入館は4時30分まで)

〒590-02 大阪府和泉市内田町85

TEL 0725-53-1071

平安時代、十一世紀の初頭、源氏物語が成立して以来、その絵画化すなわち源氏絵は、絵巻、冊子、画帖、扇面、屏風などとして数多く製作され、工芸品にも多く意匠としてとりいれられた。源氏絵は、単独、あるいは数ヶ所の有名な場面を特別に選ぶ場合もあるが、源氏五十四帖の各帖から、ひとつ以上の場面を選びワン・セットとし、情景を視覚的に味わいながらおおよそのストーリーをおえる様に構成されている場合もある。

室町時代末期から江戸時代前期にかけては、土佐派、狩野派、琳派をはじめ数多くの絵師達により源氏絵が描かれているが、

なかでも土佐派は、画帖など小画面の細密な源氏絵の製作にその腕を揮っている。

今回陳列する源氏物語手鑑はもと四十枚の折帖で、一葉ごとの表裏に、上下に詞書と絵が貼られていたのを都合八十枚の台紙に貼りなおしたものである。改装時には絵の裏に「土佐久翌」の重郭円形印と、詞書の裏に揮毫依頼覺書風の名前とが確認されたというが、台紙の上方の小さい付箋に記されている。いま一番、二二番、四一番、六一番の台紙にのみ「土佐久翌」重郭円形印の部分が貼られているが、理由は不明である。源氏物語手鑑の名称についても、もとの帖の表紙の題箋に「光源氏手加々美」とあるところから充てられたのであろうが、残念ながら以上の事以外に改装時の状況は詳らかでない。

詞書の料紙には金銀、まれには墨で秋草、松樹、藤、桜に流水など様々な文様が描きわけられ、一枚として同じ図様はない。

寸法は縦十七又は十九センチ前後の場合が多く横は一定しない。筆者については今後研究しなければならないが、付箋に拠ると、烏丸中納言、飛鳥井中納言、冷泉三位、中ノ院少将、持明院少将など能書家や御家流の書をよくした公家達二十名になる。因に烏丸家では光廣（一五七九～一六三八）が慶長十七年より元和二年まで権中納言に任官している。

絵は、五十四帖から、有名な場面を中心に八十選ばれ、土佐派独特の細密な筆致で、金銀をふんだんに駆使し、絵具は鮮麗かつ濃厚である。寸法は縦一九・八センチ前後、横二六センチ前後とほぼ一定である。

詞書と絵の内容とは完全ではないがほぼ一致する点、物語の各場面に点景として登場する花鳥草木、器物なども原文に忠実に描きこまれている点、豪華な調度本である点などを考慮すると、源氏物語を精細に読みこなす宮廷人が、注文者（又は依頼者）と絵師との間に介在した事を思わせる。

土佐光吉（一五三九～一六一三、入道して久翌）及びその周辺の絵師達の製作状況、詞書筆者の判定、注文者（又は依頼者）と詞書筆者や絵師との関係など、多く究明すべき問題を残しているが、今回の展示では八十枚のうち、四十八枚を選び、御鑑賞の際の一助に、場面の概略を付記した。

左のリストは、八十枚全部をかかげ、今回陳列のものにのみ場面の概略を記した。

付箋番号及び帖名	場面の内容概略
一番	桐壺一 桐壺の巻は後の光源氏の誕生から十二歳で元服するまでの物語。
二番	桐壺二 この場面は、源氏七歳の頃、父の桐壺帝が源氏を鴻臚館（外国人接待の為の館舎の名）で相人（人相見）にみせるところ
三番	帚木一 十二歳、清涼殿での元服の場面。源氏はまだ髪を角髪に結い着座している。帝は椅子に坐り、顔は御簾の内、衣冠束帶で裾を長く引くのが加後、姫の葵上を正妻とする。
四番	帚木二 源氏十七歳の夏の長雨の宵。源氏は着物の紐を結ばずにしどけない姿で、女から届いた恋文を頭巾替にみせる場面。他の一人は左馬頭、藤式部丞。
五番	空蝉 源氏は、伊予介の妻、空蝉が忘れられず、ある夜、寝所へ忍び込むが空蝉は小袴を脱ぎ捨てて去り、源氏はこの小袴に心情をたくし、詞書に涙をもよおす場面を採用している。
六番	夕顔一 源氏は六条御息所訪問の途中、ある家の白い花に目をとめ、その家の女童から扇にのせた夕顔をもらう。
七番	夕顔二 後にいわゆる雨夜の品定め（理想的の女性論）の段となる。
八番	若紫 若紫の巻といえば、源氏が「わらわ病」快癒の為赴いた北山のある僧房で、後の紫上を見出す場面が有名であり、多くの源氏絵がこの場面をとりあげているが、この手鑑では、その後の場面、みやまおろしの風に伴つてきてくる儀法（罪を懲悔する經典を読誦する法要）の声に感涙をもよおす場面を採用している。
九番	未摘花一 梅の香のゆかしい十六夜、源氏は未摘花の邸を訪れるが、透垣の外で頭巾将と出会いってしまう。未摘花は御簾の奥で琴を弾く。右上方雲間に十六夜の月。
十番	未摘花二 七弦の琴は琴の中でも最も格の高いものとされ、源氏物語では、源氏、未摘花の父の常陸宮などが名手とされる。
十一番	紅葉賀 源氏が元旦の朝挙に赴く前、二条院の西の対に住む紫上（十歳頃）を訪れる場面。紫上はひいな遊びをしており、源氏は「今日からはひとつおとなになられましたか」とほほえみかけている。
十二番	花の宴 この帖の名は、桐壺帝の行幸の際、源氏が冠に紅葉を挿し、青海波を舞うのに因んでいる。
十三番	葵 右大臣邸の藤の花の宴の夜、六君（朧月夜君）と再会する場面。源氏は遣り戸からあがり込もうとしているところ。御簾左下方に出衣。（女房の衣の縫、袖口などを簾の下から出すこと）空には弓張月。後、右大臣側の不興をかい、須磨へ退く一因となる。
十四番	賢木 賀茂の斎院の御禊の日、葵上の車と、六条御息所の車とが、車の立てる場所をめぐって争う場面。
十五番	花散里 六条御息所が娘の斎院と共に伊勢へ下向しようとするのをひきとめるべく、源氏が野の宮を訪う場面。源氏の手には榊をもたせており、文と共に贈ったと思われる。画面左方には、野の宮の象徴である黒木の鳥居と小柴垣を配置している。

付箋番号及び帖名

場面の内容概略

四九番	柏木二	十七番	須磨一	源氏三十六歳の頃、須磨に退去するが、その年の仲秋の名月の夜、雁のつらなつて鳴く姿に、沖合をながめながら、心情をたくして歌を詠むところ。遠景には、こぎ行く舟、雁の群、右隅に満月を配している。近く前栽には、原文中に「前栽の花、色々咲き乱れ」とあり、萩、薄、紫苑などを描いている。
四八番	柏木一	十八番	明石二	源氏帰京後の住吉詣、帝から賜わった童體身は美しい装束をし髪は角髪姿である。画面には描かれていらないが、偶然同じ日に明石上も参詣している。
四七番	若菜四	十九番	須磨一	源氏が四月のある夕月夜、松にかかる藤に心ひかれて立ち寄った荒廃した邸で、末摘花と再会する場面。蓬の露を馬の鞭ではらうのは惟光。
四五番	若菜二	二十番	須磨二	源氏を娘婿にと望む明石入道は須磨から自邸に源氏を迎える。四月のあるのどやかな夕月夜に源氏は筆を、入道が琵琶を奏する場面。庭の秋草は物語の時節にそぐわない。
四六番	若菜三	二十一番	蓬生	源氏の姫君が紫上の養女となるべく、大井の邸から二条院にひきとられる場面。別れを悲しみ、抱いているのは母の明石上。女房が蒔絵の箱の蓋に納め、さしだしているのは守り刀と天兒（子供のお守りとして傍らに置く人形）。
四四番	若菜一	二二番	関屋	源氏三一年の三月、冷泉帝の妃、梅壺女御と弘徽殿女御が御前で絵合せをするが、最後に、源氏の須磨の絵日記が人々の心をとらえ、源氏の応援する梅壺方の勝となる。この場面は源氏の思慕する藤壺中宮の前に両者の絵を納めた箱が置かれている。
三四番	螢一	二三番	絵合	源氏からようやく上洛し大井に住む明石上を源氏は嵯峨の御堂の用を口実に訪れる。
三五番	常夏二	二四番	松風	この場面は後からやってきて、狩をしている殿上人が、荻の技についた獲物の鳥を献上し、源氏は、大御酒で饗應している。
三六番	篝火	二五番	薄雲一	明石の姫君が紫上の養女となるべく、大井の邸から二条院にひきとられる場面。別れを悲しみ、抱いているのは母の明石上。女房が蒔絵の箱の蓋に納め、さしだしているのは守り刀と天兒（子供のお守りとして傍らに置く人形）。
三七番	野分	二六番	薄雲二	源氏三一年の三月、冷泉帝の妃、梅壺女御と弘徽殿女御が御前で絵合せをするが、最後に、源氏の須磨の絵日記が人々の心をとらえ、源氏の応援する梅壺方の勝となる。この場面は源氏の思慕する藤壺中宮の前に両者の絵を納めた箱が置かれている。
三八番	御幸一	二七番	槿	源氏三一年の三月、冷泉帝の妃、梅壺女御と弘徽殿女御が御前で絵合せをするが、最後に、源氏の須磨の絵日記が人々の心をとらえ、源氏の応援する梅壺方の勝となる。この場面は源氏の思慕する藤壺中宮の前に両者の絵を納めた箱が置かれている。
三九番	御幸二	二八番	乙女	この帖では源氏（三三歳～三五歳）は太政大臣になり栄達の途につくことになる。六条には大邸宅も造営され、春の趣き深い庭を配する東南の一画には源氏、紫上、明石姫君、秋の庭を配した西南の一画には秋好中宮（絵合の帖の梅壺女御）、東北、西北の一画には花散里、明石上がそれぞれ住んでいる。
四十番	藤袴	二九番	玉鬘一	この場面は、里下り中の秋好中宮が女童に色とりどりの秋の花や、紅葉をもたせて紫上に遣わすところ。その上に中宮の文をのせている。
四一番	真木柱	三〇番	玉鬘二	夕顔の遺児、玉鬘の一行が長谷寺参詣の折、椿市の宿坊で、かつて夕顔に仕えていた右近と出会う場面。画面左下方と横になつてゐるのが玉鬘か。これが契機となり、源氏の耳に届き、玉鬘は六条院に迎えられる。
四二番	梅ヶ枝	三一番	胡蝶音	年末、源氏は新春用の衣裳配りをする。おとなびた女房が御衣櫃から衣裳をとりだしたり、衣箱にいれて届けようとしている。源氏の傍らの紫上は、衣裳の色目、文様などからまだ会つたことのない明石上、花散里、玉鬘達の人柄、個性を想像している。
四三番	藤裏葉	三二番	初音	春、三月二十日すぎ、六条院での秋好中宮の御読経の初日に、紫上は法要の花を鳥、蝶の装束をさせた童にもたせ鷁首の舟に乗せて贈る場面。原文には「……鳥には銀の花瓶に桜をさし、てふは金の瓶に款冬（山吹をさす）を……」とあるが、画面でも忠実に描きわけられている。紫上としては乙女の帖での秋の花や紅葉の返礼の意味もある。
四五番	若菜二	三三番	春	夕霧が父源氏の名代で秋好中宮の野分見舞に参上し、遠くから目にした光景である。女童達は強い野分に荒された庭の秋草のなか、虫籠を手に露をかはしたり、風でいたんだ撫子を手にとつたりしている。脇息にもたれているのが秋好中宮。
四六番	若菜三	三四番	夏	十二月、冷泉帝の大原野行幸の状景。手前には鳳輦（天皇の儀式、行幸に用いる）を配し、帝が大原野に到着した体にしている。遠くは狩をする様を、この手鑑では珍しく広い視界でとらえ小画面におさめている。源氏は供奉せずに、御酒などを奉っている。
四七番	若菜一	三五番	秋	夕霧が父源氏の名代で秋好中宮の野分見舞に参上し、遠くから目にした光景である。女童達は強い野分に荒された庭の秋草のなか、虫籠を手に露をかはしたり、風でいたんだ撫子を手にとつたりしている。脇息にもたれているのが秋好中宮。
四八番	柏木一	三六番	冬	大宮の喪に服している玉鬘のとを、同じく服喪中の夕霧が源氏の使いで訪れた折、藤袴の花と求愛の歌を贈る。両者共、鈍色（薄墨色）の喪服姿。夕霧が冠の纓を外巻きにしてとめているのは凶事の作法である。この時すでに玉鬘は尚侍出仕が決定している。
四九番	柏木二	三七番	春	源氏は玉鬘を髭黒大将に嫁がせる決心をする。髭黒は玉鬘を自邸に迎える準備をすすめ、ある雪の夜、玉鬘を訪れるようとしたやさき、傷心の北の方に物怪がつき、火取香炉の灰をうしろからあびせる場面。豈に炉がきつてあるが当時の習慣にはない。
五〇番	柏木三	三八番	夏	源氏三九歳の春、二月十日、丁度、雨がすこし降り、紅梅のゆかしい頃、薫物競べが催された。
五一年	柏木四	三九番	秋	その夜、源氏は螢兵部卿宮に裝束一揃、薫物一壺を届けるところ。
五二年	柏木五	四〇番	冬	藤の花の宴に内大臣は夕霧を招き、かつてから相思相愛の娘の雲井雁との結婚を許す。柏木（頭中将）がそばから藤の枝を、客人夕闇の盃に酌をしてから添えている。その横で玉鬘の子供達が笙、横笛を吹いている。
五三年	柏木六	四一番	春	六条院で明石女御が皇子を出産。皇子を抱くのは紫上。明石上は産湯をつかわす際、介添役を立派に務める。部屋の奥に湯桶、角盤、木製の桶などを描いている。帖の名は源氏四十歳の賀を祝して、玉鬘が若菜を奉つたことに由来する。賀の後、女三宮が源氏に嫁し、正妻となる。
五四年	柏木七	四二番	夏	正月二十日頃、庭の梅のさかりの静かな宵、女三宮の部屋での女樂の場面。左端、脇息にもたれているのが明石女御。まんなかが六弦の和琴、（図では十三弦の箏になつていて）を弾く紫上。右が七弦の琴を弾く女三宮。後姿が琵琶を弾く明石上。御簾の外では夕霧が明石女御の弾く箏の調子をあわせている。その横で玉鬘の子供達が笙、横笛を吹いている。
五五年	柏木八	四三番	秋	女三宮を忘れられず、密会した柏木は自責の念から煩悶し、病床に臥してしまう。両親が加持祈祷をさせる為、聖を呼んで対座しているところ。
五六年	柏木九	四五番	冬	柏木は後、むなしく他界してしまう。女三宮は不義の子菫を生み、髪をおろし受戒する。

付箋番号及び帖名

場面の内容概略

源氏五十歳の秋、八月十五日の月夜、六条院で女三宮が仏前で念誦しているところへ源氏が訪れ、折からの鈴虫の音に歌を贈答し、琴をかきながら贈られたことに因む。

源三宮のもとで育つ薫が筍をかもうとする様子を、源氏は複雑な思いで、「子は捨てがたい」との意の歌を詠む。横笛とは後に柏木遺愛の笛が夕

らす。後向で仏前に關伽を供えていた姿が女三宮、左上方に満月。

柏木の亡きあと、その妻の落葉宮に心よせる夕霧は、八月十日すぎ、小野山荘も宮を訪うが、軽々しいわざがたつの懸念して供の者に大きな声をたてない様に注意を与えている。原文では、日没の頃一面に霧たちこめる設定になつております。遠景の、鹿、瀧などは語られていない。後に御息所亡きあと、落葉宮をなぐさめる為、九月十日すぎの夕方に訪れた時の情景が、この絵の鹿、瀧、稻むらなどの様子とほぼ一致する。

五三番 夕霧一 鈴虫一 横笛一

五六番 幻 宮 御法

五五番 幻 宮 御法

五四番 夕霧二 鈴虫一 横笛一

五一番 夕霧二 鈴虫一 横笛一

五二番 夕霧一 鈴虫一 横笛一

五三番 夕霧一 鈴虫一 横笛一

五六番 幻 宮 御法

五五番 幻 宮 御法

五四番 夕霧二 鈴虫一 横笛一

五一番 夕霧一 鈴虫一 横笛一

五二番 夕霧一 鈴虫一 横笛一

五三番 夕霧一 鈴虫一 横笛一

五六番 幻 宮 御法

五五番 幻 宮 御法

五四番 夕霧二 鈴虫一 横笛一

五一番 夕霧一 鈴虫一 横笛一

五二番 夕霧一 鈴虫一 横笛一

五三番 夕霧一 鈴虫一 横笛一

五六番 幻 宮 御法

五五番 幻 宮 御法

五四番 夕霧二 鈴虫一 横笛一

五一番 夕霧一 鈴虫一 横笛一

五二番 夕霧一 鈴虫一 横笛一

五三番 夕霧一 鈴虫一 横笛一

五六番 幻 宮 御法

五五番 幻 宮 御法

五四番 夕霧二 鈴虫一 横笛一

五一番 夕霧一 鈴虫一 横笛一

五二番 夕霧一 鈴虫一 横笛一

五三番 夕霧一 鈴虫一 横笛一

五六番 幻 宮 御法

五五番 幻 宮 御法

五四番 夕霧二 鈴虫一 横笛一

五一番 夕霧一 鈴虫一 横笛一

五二番 夕霧一 鈴虫一 横笛一

五三番 夕霧一 鈴虫一 横笛一

五六番 幻 宮 御法

五五番 幻 宮 御法

五四番 夕霧二 鈴虫一 横笛一

五一番 夕霧一 鈴虫一 横笛一

五二番 夕霧一 鈴虫一 横笛一

五三番 夕霧一 鈴虫一 横笛一

五六番 幻 宮 御法

五五番 幻 宮 御法

付箋番号及び帖名

場面の内容概略

八十番 夢の浮橋	絹本著色 紙本墨書き	一帖 十二巻のうち
七九番 手習三	絹本著色 紙本墨書き	一帖 十二巻のうち
七八番 手習二	絹本著色 紙本墨書き	一帖 十二巻のうち
七七番 手習一	絹本著色 紙本墨書き	一帖 十二巻のうち
七六番 蜻蛉二	絹本著色 紙本墨書き	一帖 十二巻のうち
七五番 浮舟二	絹本著色 紙本墨書き	一帖 十二巻のうち
七四番 東屋一	絹本著色 紙本墨書き	一帖 十二巻のうち
七三番 東屋二	絹本著色 紙本墨書き	一帖 十二巻のうち
七二番 東屋一	絹本著色 紙本墨書き	一帖 十二巻のうち
七一番 宿木二	絹本著色 紙本墨書き	一帖 十二巻のうち
七十番 宿木一	絹本著色 紙本墨書き	一帖 十二巻のうち
六九番 宿木一	絹本著色 紙本墨書き	一帖 十二巻のうち
六八番 総角二	絹本著色 紙本墨書き	一帖 十二巻のうち
六七番 総角一	絹本著色 紙本墨書き	一帖 十二巻のうち
六六番 橋姫一	絹本著色 紙本墨書き	一帖 十二巻のうち
六五番 橋姫二	絹本著色 紙本墨書き	一帖 十二巻のうち
六四番 橋姫三	絹本著色 紙本墨書き	一帖 十二巻のうち
六三番 竹河二	絹本著色 紙本墨書き	一帖 十二巻のうち
六一一番 竹河一	絹本著色 紙本墨書き	一帖 十二巻のうち
六十番 竹河一	絹本著色 紙本墨書き	一帖 十二巻のうち
六二番 橋姫一	絹本著色 紙本墨書き	一帖 十二巻のうち
六三番 橋姫二	絹本著色 紙本墨書き	一帖 十二巻のうち
六四番 橋姫三	絹本著色 紙本墨書き	一帖 十二巻のうち
六五番 橋姫一	絹本著色 紙本墨書き	一帖 十二巻のうち
六六番 橋姫一	絹本著色 紙本墨書き	一帖 十二巻のうち
六七番 橋姫一	絹本著色 紙本墨書き	一帖 十二巻のうち
六八番 橋姫一	絹本著色 紙本墨書き	一帖 十二巻のうち
六九番 橋姫一	絹本著色 紙本墨書き	一帖 十二巻のうち
七〇番 橋姫一	絹本著色 紙本墨書き	一帖 十二巻のうち
七一番 橋姫一	絹本著色 紙本墨書き	一帖 十二巻のうち
七二番 橋姫一	絹本著色 紙本墨書き	一帖 十二巻のうち
七三番 橋姫一	絹本著色 紙本墨書き	一帖 十二巻のうち
七四番 橋姫一	絹本著色 紙本墨書き	一帖 十二巻のうち
七五番 橋姫一	絹本著色 紙本墨書き	一帖 十二巻のうち
七六番 橋姫一	絹本著色 紙本墨書き	一帖 十二巻のうち
七七番 橋姫一	絹本著色 紙本墨書き	一帖 十二巻のうち
七八番 橋姫一	絹本著色 紙本墨書き	一帖 十二巻のうち
七九番 橋姫一	絹本著色 紙本墨書き	一帖 十二巻のうち
八十番 橋姫一	絹本著色 紙本墨書き	一帖 十二巻のうち

源氏物語手鑑以外に左記の十点を陳列します。

- 1 新三十六歌仙図帖 土佐光成筆 絹本著色 一帖
- 2 弘法大師行状記 手本 伊勢物語 (二十段、二十一段) 紙本墨書き 一卷
- 3 手本 近衛家熙筆 紙本墨書き 一卷

江戸時代 江戸時代

◎54 韶銅 韶銅

66 金銅 金銅

77 根来 誕生釈迦仏立像

88 藤絵 灑水器形茶器

99 蒔絵 蓬萊図耳鹽

10 桐文懸盤

◎54 韶銅 韶銅

66 金銅 金銅

77 根来 誕生釈迦仏立像

88 藤絵 灑水器形茶器

99 蒔絵 蓬萊図耳鹽

10 桐文懸盤

源氏物語主要人物系図 —— 源氏物語手鑑に登場する主要人物 ——

